

- 1 つくしんぼ夜となりたれば星を指す
- 2 七色の息もて地虫穴を出づ
- 3 黒潮のきりりとみゆる椿餅
- 4 雲雀野の女にしては大きな手
- 5 くつべらはせのびのかたち春の雲
- 6 下萌をくすぐつてゆくホースかな
- 7 下萌をゆく麗しの尻尾かな
- 8 春塵の中より埴輪出土せり
- 9 鷹化して鳩となる日の土器の肌
- 10 窯変をいざなふ東風の吹きにけり
- 11 体内に丹のいろありて囀れり
- 12 雛の間に雛をおこさぬやうに入る
- 13 土雛や日向に置けばぬくもりて
- 14 草餅のために机をきれいにす
- 15 肉球が押へてをりぬ花の塵
- 16 風船を活けたくなりぬミロの壺
- 17 沈丁を猫のかほして嗅ぎにけり
- 18 野を焼いてきし男等のライスカレー
- 19 行先の二転三転猫の恋
- 20 泣く人がいそぎんちやくに見えてならぬ
- 21 深海にかゞやく地層夏来る
- 22 鳥の巣を出て何年が過ぎたらう
- 23 明易のわれもむかしは木から木へ
- 24 番地番号ありさうな小鳥の巣
- 25 犬が鼻押しあててくる薄暑かな
- 26 金魚すゝむ無数の窓を開けながら
- 27 梔子の香よりはじまるぼんやり病
- 28 月に海火星に運河更衣
- 29 疑問符のかたちに蚯蚓干からびぬ
- 30 水替えて金魚が水をまぶしがる
- 31 金魚らは鼻のあたりでも思ふ
- 32 日輪をひらりとかはす金魚かな
- 33 ばらばらに向きつゝ金魚群れてゐる
- 34 足音はとなりの部屋へ夜の秋
- 35 月光に体をあづけ熱帯魚
- 36 金魚沈むまはりの水をくゆらせて
- 37 金魚美し糞がなかなか切れずとも
- 38 にこりともぶすりともせぬ金魚かな
- 39 夜汽車にてはこばれてきし栄螺かと
- 40 夜濯にかゞやき了へし星ひとつ
- 41 薔薇色に口を汚してばらの虫
- 42 レンズ奥の小さな土星薔薇匂ふ
- 43 白南風や石の臉のいまひらく
- 44 金無垢をまとひて蠅のうごかざる
- 45 抽斗に刺繍の木杵蛙鳴く
- 46 目玉から描きはじめたる金魚かな
- 47 寂しさのはてなむ国へかたつむり
- 48 先客のうろんな二人ソーダ水
- 49 天井に漣ひとつ金魚玉
- 50 寝姿がうつくしいので茄子にする

- 75 行く秋の象にちひさな耳の穴
- 74 微熱止まざりし雀は蛤に
- 73 曼珠沙華から出られない蟻一匹
- 72 天降りたるごとくに人やお花畠
- 71 くちびるにうづもれてゆくぶどうかな
- 70 星雲の一部に皺や衣被
- 69 複葉機飛び立ちさうな花野かな
- 68 芒原出て猫の胴すこし伸び
- 67 古代魚のかほとなりたる秋思かな
- 66 消印のリオ・デ・ジャネイロ馬肥ゆる
- 65 蜻蛉らのまぶしき乱をまのあたり
- 64 登高のここより象に乗れといふ
- 63 新涼や油のねむる硝子瓶
- 62 掌に傾ぐシュークリームや魂祭
- 61 金魚の目にうつるものみな難破船
- 60 ぱびるすに早の記述ありにけり
- 59 高架下ゆくとき金魚かがやけり
- 58 自転ゆゑ金魚のふいにひるがへる
- 57 毛虫進むおしりの皮をだぶつかせ
- 56 誘蛾灯には番人が棲んでゐる
- 55 舟虫走るすこし早めてゐる時計
- 54 月光を食べてゐるらん蝸牛
- 53 しづみかけては子子ののびあがり
- 52 地面引き攀らせて守宮すすみけり
- 51 屋上にそつと出てみる跣かな
- 76 溢蚊のからだはきつと錆びてゐる
- 77 晩秋の荒物屋へととり急ぎ
- 78 謎の虫そつとつぶして冬に入る
- 79 はつふゆの濃き影をもてゆかむとすがぎぐげと啼く鳥ほしき寒露かな
- 80 鹿の眼のつるりと吾をうつしけり
- 81 凧の日の運転手馬のかほ
- 82 鹿鳴くや家のどこかに鏡の間
- 83 枯葎すんすんとゆく猫だもの
- 84 よぢ登るやうにりんごを齧りけり
- 85 手品師の道具のひとつ冬金魚
- 86 龍だつたことおもひだす海鼠かな
- 87 林檎剥きりんごと時を遡る
- 88 告ぐるとき枯野のふつと匂ひだす
- 89 梟のとぶたびずれる世界地図
- 90 御者の白手袋蓮の実光る
- 91 耳立てゝ樹氷林より戻りくる
- 92 兎とは寝息のやうな息をする
- 93 ぴつたりの身の丈の冬金魚かな
- 94 留守電にうつくしきこゑ冬金魚
- 95 エーテルといふ白魚のやうなもの
- 96 目の下にうつすらと隈流水期
- 97 頭上注意頭上注意露の臺
- 98 鼻の利く一日なりし春の雪
- 99 方舟のやうな気がして北窓開く